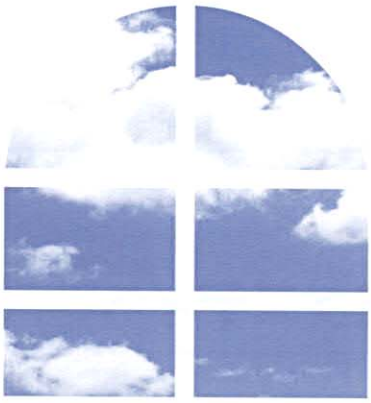

組織立ち上げ支援とたまり場支援
～立川市社協での取り組み～

立川市社会福祉協議会
伊藤　祐子

はじめに

立川市社協で小地域福祉活動に本格的に取り組み始めたのは平成8年。地域福祉市民活動計画「あいあいプラン21」を立ち上げた時からである。プラン推進のための4委員会の一つである「小地域福祉活動推進委員会」で検討し、地域の中で活動するいくつかのインフォーマル・フォーマルな団体や、ボランティア活動をしている個人が力を合わせ、「安心して暮らせるまちづくり」に参画する活動母体として、「グッドネイバー運動」という名称で実践していくことを計画した。近年、大型デパートが並び人通りの絶えることのない駅周辺を中心として、立川にも都市化の波が押し寄せており、「隣に住んでいる人の顔も知らない」という現状から、「昔の『向こう三軒両隣おつきあい』が必要ではないか」という意見がちらほら聞かれていたこともあり、「グッドネイバー運動」は、そこに集う住民が自分自身の手で、誰もがお互いに助け合えるまちをつくることを目的とした。

1 ちょっとしたことを助け合える地域にしたい
～グッドネイバー運動の始まり～

(1) まずは社協主催の地区懇談会での住民への投げかけから

グッドネイバー運動をしかけていくにあたって、①町を単位とする、②町人口1世帯あたり50円という予算で運営する、という条件を設定。立川市内の13町のうち、2町(柴崎町・栄町)を「モデル地区」に指定し、実験的に行うこととした。しかける方法としては、その町に居住する個人ボランティア(ボランティア・センターの名簿にある個人ボランティア、ボランティア・グループに所属する個人)や、その町にある福祉施設・団体(小規模作業所など)、学校関係者(PTAなど)、100名ほどに声をかけ、「地域の福祉を考える集いに参加しませんか」と呼びかける。そのようにして地区懇談会を数回開催するが、社協からは「自分たちが地域で暮らしていくときに、どんなことが不安か」「どんなことがあれば安心して暮らせるか」などの問いかけをしていく。そこであがる声は「隣の顔も知らない地区がある」「自治会にはいっていない人も増えてきた」などの不安材料である。社協では、「例えば要介護の方であれば、福祉サービスを利用していくことが不可欠であるが、そのほかにも、暮らしやすくできるまちの力が必要では?」という投げかけをしたところ、地域から「足に障害のある方がいて、ある日部屋の電球が切れてしまって、自分では付け替えられず、暗い時間を過ごさなければならなかった」という話などが出て、ちょっとしたことを助け合える地域にしよう、との意見となった。そのようにして、「自分たちの手で福祉のまちづくりをやろう」という思いの強い20名程度が、「グッドネイバー運動推進

団体」を設立し、それぞれに活動を展開していく、という流れであった。

当初の住民たちの姿勢は、「自分で役に立てるなら」「何かやってみよう」というものだったが、社協スタッフはグッドネイバー運動母体が、グループとして成長していくことも支援することを目指した。自分たちが暮らしやすくなるためには、自分たちの手で変えていくことが必要で、一人一人の主体性が大切、という共通認識を持ちながら、一方で、できる人ができる時に活動することで、特定の人物だけの負担にならないよう続けていくことも社協スタッフの中で確認しあった。

2地区とも、当初集まった100名近い住民の、最近の地域関係の希薄さに危惧を抱いている様子がうかがえた。団体を立ち上げることにも一同が賛成したが、すでに何らかの活動をしていたり、仕事を持っていたりする人が多い中で、社協からお願いしてグッドネイバー推進団体の運営委員になっていただく、という形態であったためか、委員にならなかった住民が、その後団体を外側から積極的に支援する、という輪にできなかった。サポーターを意識的に作れなかったというのが反省点であり、特に2地区のうち1地区では、その後の運営の中で、「地域の中で知名度を得ていく」という点に苦慮することとなった。

(2)「立ち上げる」ためかなりの部分を社協がスタッフが担う

この時の社協実働スタッフは2人。1人1地区ずつを担当し、立ち上げからかなり手をかけて活動を支援していった。具体的には、活動に役立ちそうな情報提供(他市・他団体の具体的な取り組みについて、など)を始めとし、核になるメンバーとの意見調整、場の設定、そしてすでにある地域団体(自治会、民生委員、など)への周知など、かなりの部分をスタッフが担った。スタッフの目標は「小地域活動できる“組織”を立ち上げる」というもので、その点からすれば、達成できたと評価できる。

こうして2団体の活動をモデルとして始まった「グッドネイバー運動」だが、ふたを開けてみると、2団体の特色がかなり違うことがはっきりしてきた。柴崎町では、元来立川の「本家本元」とされる古い地区であるため、地元の顔が存在し、自治会組織もまだまだしっかりしている地域。一方栄町は、集合住宅が多く、比較的新しい一戸建てが立ち並ぶエリアもあり、住民の流動が激しく、自治会加入率も年々落ちてきているという地域。自然とグッドネイバーの委員も、柴崎町では自治会役員や民生委員が核となり、栄町では個人ボランティアが核となる。このことは、今後の活動の方向性や住民への広がりという点でかなり異なる傾向を示すこととなる。

(3)社協主導から各団体主導へ　グッドネイバー運動母体も4団体に

・・・・・平成10年度

立ち上げから丸2年が経過した平成10年4月。これまで、社協指定の「モデル地区」として活動していた2団体を、正式に主体的な活動母体にするべくしきり直し、社協スタッフ主導ではなく団体主導で、社協がサポートする、という意味付けを確認した。2年間の活動の中で、それぞれがサロンや介護教室、広報誌作りを積み重ねていたことで、今後の活動に対する自信と、よりよい活動への欲求とで、スムースに移行できたように思う。同時にこの年、すでに地域活動をしていた他地区の2組織に対して、「グッドネイバー運動」母体として活動しないかと社協スタッフが働きかけ、新たに、若葉町、西砂・一番町にグッドネイバー運動母体が活動し始めることとなった。若葉町の方は、「福祉を考える会」として自治会組織が基盤となって10年近く活動していた組織。西砂・一番町の方では、その地域で元来活動していたボランティア・グループが元となっている。

この年度よりふれあいのまちづくり事業の指定を受け、スタッフを兼務ではあるが4人体制とし、それぞれの地区の支援をしていくこととした。具体的には、それぞれの団体が開催する月1回の定例

会に参加し、各行事に参加・支援をする。それぞれの動きによっては、他団体と連携した方が望ましいことがあり、その場合には個人や団体を紹介し、地域の中でいくつかの団体が自然につながれるようにスタッフは支援をする。この頃には、4地区の特色はかなりはっきりしてきた。柴崎町は自治会組織を有効に使って一斉に広報・周知することを得意とし、栄町はサロンなどの積み重ねによって、個人のつながりを徐々に増やし、若葉町は、元来の目標である「わが町に在宅介護支援センターを誘致」に向けて、福祉に対する意識調査を実施、西砂・一番地区では、特養や社協作業所でのボランティア活動を展開させていた。社協スタッフは、各地区に通いながら、その地域の特色や実情と、その団体のメンバーの得意分野に合わせた活動が展開できるよう支援していった。

2 組織づくりから「たまり場」活動支援へ

(1) 他地区での組織立ち上げが進まない ・・・平成11年度

平成11年には、各団体とも活動を展開すること自体は、ノウハウを身に付け、スムースな活動を展開できるようになってきた。しかし、ここに、それぞれの団体が抱える課題も明確になってきた。柴崎町では、「自治会以外の住民に活動が広がりにくい」「また運営委員が固定化してしまう(すでにどこかの“役員”をやっている委員がほとんど)」。栄町では、「自治会や民生委員との連携が思うように進まず、個人には知られるが、団体間に知名度がなかなか高まらない」。若葉町では、ミニデイサービスを展開している同地区のボランティア・グループと摩擦が起きる(「グッドネイバー運動とは、サロンなどのサービスを展開する団体ではないのか」という批判など)。西砂・一番地区では、「他の地域よりもエリアが広いため、なかなか活動が隅々に広がっていかない」。

また、社協スタッフの間でも課題を抱えていた。平成11年後半から12年にかけて手がける予定であった、他地区でのグッドネイバー運動の立ち上げがなかなか進まない。当初2地区の立ち上げのように、何人かに声をかけようと当たったところ、これまでのどの町より面積と人口の多い富士見町では、地形の問題(町の南北でかなりの高低がある)や住民層の違い(北には古くから住む層、南は大きな団地に若い層が住む)があることから、昔からひとつの町にはくくれないという事実(反発も)があった。加えて、町の北側の地域は柴崎町と同じくかなり古い地区であるため、自治会組織がしっかりしており、子ども会や青少年健全育成会、会館運営委員会など、各々の組織も定期的に活動している中で、各団体がすでに連携し、地域でのミニデイサービスの可能性などが話し合われていた。「今さらグッドネイバー運動として集まっても、メンバーは同じ」「我々の活動とどう違うのか」などの声が多かったため、社協スタッフとしても、ここで新たに組織をもう一つ立ち上げることに疑問がわいてきたのである。

一方、高松町という地域では、もともと社協スタッフが担当している住民参加型有償家事援助サービスを利用していたAさんが自宅を開放してくれることになったことをきっかけに、グッドネイバー運動の足がかりを作ろうとした。Aさんの自宅で、近所に住む軽い痴呆のある高齢の方や小さい子どもらと、近所に住む何人かのボランティアが何時間かを共に過ごすミニデイサービスを企画。運営を主導的にボランティアにやってもらうために、グループとして意識付けし、その中でローテーションを組んでもらう予定であった。2回ほど集まり、ボランティアとして活動する予定の個人からは「事故があったらどうすればいいか」などの不安の声は出

たものの、「定期的にやってみよう」という方向で話はまとまりかけていた。しかしここで、地域の団体から反対の声があがってきた。「公共の施設を使うのならともかく、個人の家を使うのはいかがか。何かあったら社協はどう責任をとれるのか」という意見であったが、このような声があがってきたことの元には、「地域団体にきちんと話を通した上でことを進めていってくれないと困る」という感情があったようである。また、地域の団体間にあまり友好的ではない関係もあった。このことで、地域で多少の摩擦が起きたようであり、このままでは実際活動する個人にも影響を与えてしまいかねないので、活動をしばらく見合わせることとなった。社協スタッフは、Aさんの好意や集まってくれたボランティアの思いを実現できない残念さと、地域団体等からの反発とで、とても苦しい思いをし、ここでも、地域の中で新しい組織を社協が表立って作り上げることによる難しさが感じられた。

(2) "組織づくり"にこだわるのはやめて、今ある営みから広げていく⇒「たまり場」活動へ ・・・平成12年度

平成12年にはいってから、社協スタッフ間で検討した結果、「"組織づくり"にこだわるのはやめよう」という方針に変更した。ここに至るまでに、スタッフで木原孝久氏の著書を読んだことが大きい。地域の中で、摩擦を起こさず活動が自然に広がるにはどうすればよいか悩んでいた時にこの著書を読んだのだが、そこには、いわゆる"組織の立ち上げ"とは逆のことが事例として挙げられていた。「とにかく自然に。福祉の旗を立てると、それだけで地域は一歩ひく」「助けられる側と助ける側にわけるな」など、この方法でいけばAさんの自宅も地域に自然に開放できる可能性がある。この活動を「たまり場」活動とし、組織としては立ち上げず、今ある営みにはいりながら、視野を広げていくという支援をしていくことにした。

自宅に入りお茶のみ話の延長で

それからは、社協スタッフが本当に地域の中に出て、人とのつながりを積極的に求めながら自然に地域にとけこむことにした。以前からの活動の中で知り合ったボランティアの方々と個別に話し、その方が地域で何ができるか具体的に考えていった。地域を自転車や原付でまわりながら、自宅に入れてもらってお茶を飲みながら話をし、頃合を見ながら「今度ここにもう一人連れてきてもいい?」などと働きかける。富士見町のある丁目では自治会の婦人会が、月に1回おしゃべり会をやっていたが、その人々に働きかけて、自分たちだけでなく地域の住民も呼んでサロンをやってみようと会を開いた。ここに至るには、キーパーソンと出会えたことが大きい。彼女は元々ボランティア活動をしていたのだが、「何か地域の問題に取り組みたい」と話してくれたことがきっかけで、始まった活動である。

「助けるよ」ではなく、「助けて」といえる力を引き出す

また、富士見町のある大きな団地で結成されたたすけあいグループに働きかけ、今後の活動の方向性をさぐっている。ここは、今ちょうど過渡期を迎えている。「こちらに助ける人が何人かいるから、どうぞ気軽に『助けて』と声をかけてください」と、声を大にして団地内でPR活動をしているのだが、なかなかニーズが集まらない。エレベーターのない5階に住んでいる80、90歳の高齢者だって何人もいるのに、ニーズがここにないわけはないのに、という悩みがある。社協スタッフからは、「こちらで『助けるからおいで』と呼びかけても難しいのではないか。部屋からなかなか出られない人には、来てもらう方法を考えるのもいいが、こっちからお茶飲みに行ってみては。『助けるよ』ではなく、『助けて』と、その方の力を引き出すように考えると、関係がうまくいくかも」と投げかけている。このように、今までよりもより地域の中の住民に密着した形で支援している。

お父さんお帰りなさいパーティーで人材発掘

また、今年度初めて行った定年後の男性向け企画「お父さんお帰りなさいパーティー」も、人材発掘のための試みだったが、この周知の際には、意識して、地域の商店や個人宅にチラシを貼らせてもらった。こうすることで社協スタッフの顔を覚えてもらえるし、人づてで参加者がやってくるだろうという効果を狙ったものである。参加者が集まり、「何をやったらいいか考え中」という方に、地域活動やボランティア活動の話はできたが、残念なのは、この後のフォローができなかった点である。今後、また改めて実施し、地域活動へ人と人とをつなげていく手段としたい。

3 今後の課題 ～"人づて"や"口コミ"の効果を活かしながら

最近のグッドネイバー活動も、大きな効果をあげてきている。栄町では、地元のろう学校と連携し、町内のゴミ拾い活動を地元自治会と一緒に実施したり、活動に参加してくれている地元中学生たちを通して、中学校に活動の周知をしたりすることで、他団体と連携を図っている。若葉町では、前述のボランティアグループとも連携し、各委員がそれぞれの自治会でサロンを開き、団地内のたすけあい活動を支援している。若葉町の念願だった在宅介護支援センターも、地元に新しくできた老人保健施設の中に設置され、グッドネイバー推進団体がセンターと協働で介護教室や講演会を開くなどしている。

しかし、課題もある。社協スタッフは体制としては4人だが、他にケースワークを抱えているためなかなか時間配分が難しい。生活福祉資金や家事援助サービス、配食サービスなど、相談がはいれば訪問し、動かなければならない。土日や夜間のボランティア活動支援が重なるので、そのほかの時間でまだ手をつけていない地域へと出て行くことになるが、なかなか難しい。本や他の活動を調べることもとても大切だが、できていない。

たまり場活動やグッドネイバー活動を通して感じているのは、地域の中でやはり何がキーかというと、人である。外側からぼんやり眺めていては見えない人と人とのつながりがある。これを無視しては活動が行き詰まるし、逆に活用できれば、有意義な成果につながる。"人づて"や"口コミ"の効果は絶大である。その点では、やはりコミュニティワークだけでなく、ケースワークをすることで人とのつながりができるし、ニーズも見える。ボランティア・センターと連携することも同様である。組織と組織で話をした方がいいこともあり、人と人とで話した方がいい場合もある。いずれにしても、お互い顔を見せ合って活動していくことを意識的にやっていれば、すでにもう地域にたくさん存在する、なんとなく人がたまっている場所や問題が持ち込まれる人などに気づいていけると思う。

★先日行われた、平成12年度最後の栄町グッドネイバー定例会で…

小地域活動がかなり進んでいるこのグッドネイバーでは、社協スタッフの予想とは裏腹に、何人かのメンバーたちが最近行き詰まりを感じている様子。聞くと、「計画した事業は一生懸命やって、来てくれるみんなも楽しみだと言ってくれるし、とっても忙しいんだけど、何かむなしい」とのこと。ここまでとにかく懸命に走ってきた栄町だが、息切れしているのか、目標を見失っているためか、社協スタッフの支援が必要だと感じた。

年度最後の定例会ということで、これまでを振り返ろうと社協スタッフより提案した。メンバーに、グッドネイバーをやっていて自分にプラスになったことを出してもらい、一方で、今現在のメンバー自身の悩みやニーズを出してもらった。社協スタッフからは、いくつかの資料を提示して、メンバーには見えていない、この活動のもたらす効果について話をした。例えば、「いつも決まった人がサロンにくるけれど・・」という意見には、その人にとって、いつも行く場所があるということが喜びだし、人との出会いがそこにあるということが、特に高齢の方にとっては価値のあることだということを。また、「協力してくれるメンバーが増えない」という声には、名簿に載っているメンバーだけではなく、活動しているメンバーを支えている家族や、いつもイベントに来てくれる住民も、グッドネイバーのサポーターだ、という話を。

メンバーからは、「そういえば、この活動をするようになってから、町で会ったときに言葉をかわす人がふえた」というような声が聞かれ、以前に比べて、自分たちを評価できたようではあったが、もう一度、このグッドネイバーが目指しているものや、メンバーの生き方とこの活動が合致していることの確認を少しゆっくりやっていくことが必要だと感じている。

（地域活動推進課　主事）